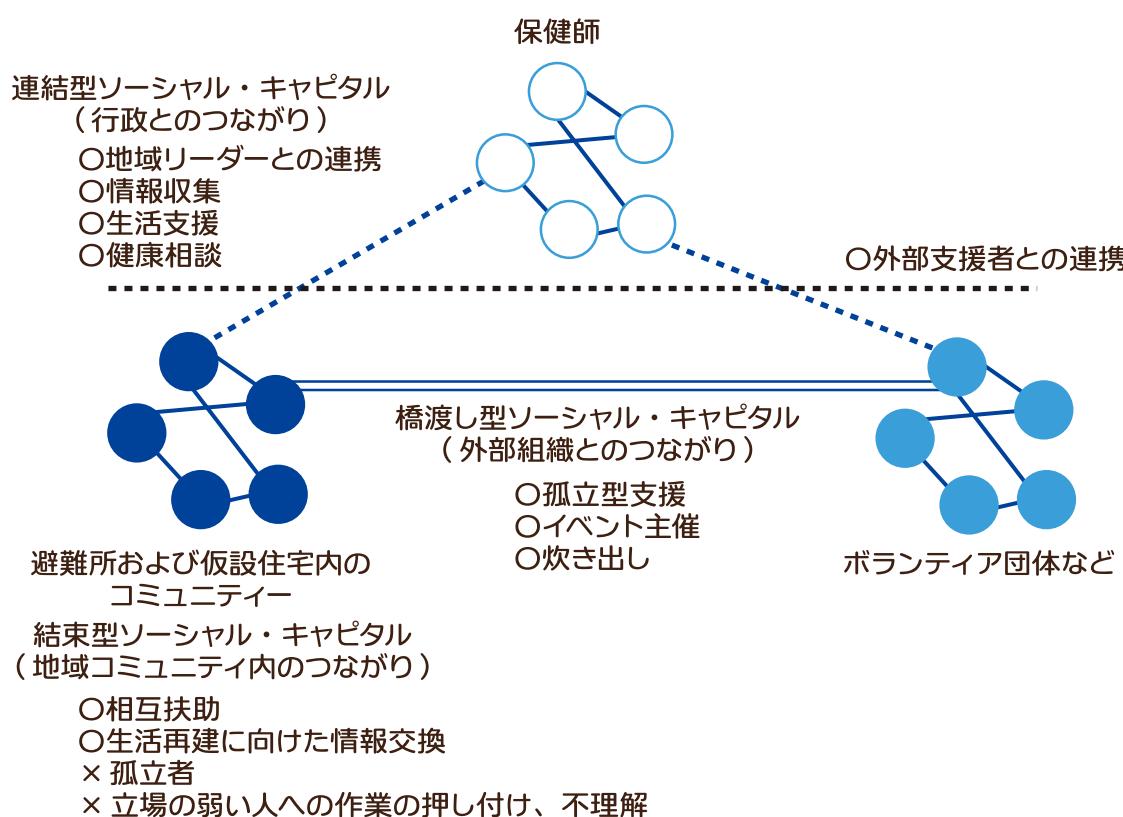


# 被災地の人のつながり（ソーシャル・キャピタル）の光と影

～東日本大震災後の保健師22名へのインタビューから～

東日本大震災後に被災者の生活支援に携わった宮城県の保健師22名を対象にグループインタビューを行い、震災後の被災者の生活において人とのつながりが果たした役割やその機能を検証しました。震災前のつながりが豊かであった地区では、被災後の助け合いが見られたり、生活支援に必要な情報収集が効率的に行われていました。また、健康づくりを目的とした体操などを通して新たなつながりが生まれるなど、介入によってつながりが形成される可能性も見出されました。一方で、避難所や仮設住宅団地で孤立する人がいたり、負担の大きい作業を強いられる人がいたりと、人とのつながりの負の側面も見られました。被災後の生活支援につながりを活用し、つながりの負の側面を緩和するためには、必要に応じてボランティア団体や行政との連携が必要であることが示唆されました。

図 保健師、外部団体、被災者集団の間に見られた社会的つながり



注 図は著者がAldrich (2012)を改変

## 背景

人とのつながり（ソーシャル・キャピタル）が大災害後の被災地における健康保護に有効であることが示されてきたが、被災者支援に携わった専門職が経験したつながりの事例を収集し、整理した研究は少ない。本研究では、災害発生直後から被災地域の

復興に密接に関わった保健師を対象にグループインタビューを実施し、被災者支援活動を通して経験した人とのつながりと被災者の生活や健康との関連を記述した。

## 方法

2013年10月に開催された宮城県看護協会の保健師職能研修会に出席し、その後、グループインタビューへの参加に応じた保健師22名が調査対象である。参加者を4つのグループに分け、各グループには研究者が1人ずつ記録係兼ファシリテーターとして参加した。対象者にグループインタビューの趣旨等を説明した後に、20分のグループ討論とそこで

得られた意見の全体に対するフィードバックを2回行い、最後に10分程度のまとめを行った。1回目のグループ討論では、被災地での経験・観察で人とのつながりと関連していると思われること、2回目は人とのつながりの地域づくりへの応用を中心テーマに据えたものについて発言するように伝えた。

## 結果と考察

多くの保健師が、人とのつながりが被災後の支え合いや生活支援に役立っていることを目の当たりにしていた。例えば、1) 震災前から集会所で防災訓練や備蓄をしていた地域は、震災後に行政による支援が届く前から訓練の経験を活かして支えあって生活していた。2) 仮設住宅入居時に、震災前の地域ごとの入居を進めた自治体もあったが、被災前の地域での人間関係やまとめ役が機能していた仮設住宅の方が上手く運営できているという話が多数聞かれた。3) ある地域では、住民の間で自治会長などの地域のキーマンに関する情報が共有されており、行政と連携して速やかに問題解決にあたることができた。4) 仮設住宅に入居した近隣住民同士

が近隣住民同士が顔見知りでなかった場合でも、健康づくりを目的とした集会所での体操や外部支援者が主催したイベントへの参加を通して新たなつながりが築かれることもあった。5) 地域コミュニティ内のつながりは重要だが、コミュニティになじめない人が孤立したり、権威的な男性リーダーのいる地域では女性は不満があつても口にすることをためらったりと弊害も目立つ場合があった。つながりの負の側面を解消するために、ボランティア団体に孤立者支援を依頼したり、行政と問題を共有するなど、地域の外とのつながりを活用することが重要だと思われる。

## 本研究の意義

人とのつながりは被災後の支え合いを促したり、行政による生活支援を円滑にする役割がある。地域内のつながりを活用して支え合いを促すとともに、

ボランティア団体や行政と連携することで、つながりがもたらす負の影響を抑制しながら生活支援できる可能性が示唆された。

### 書籍情報

引地博之、近藤克則、相田潤、近藤尚己（2015）集団災害医療における「人とのつながり」の効果－東日本大震災後の被災者支援に携わった保健師を対象としたグループインタビューから－。日本集団災害医学会誌、20 (1), 51-56.

### 謝辞

本研究は、アメリカ国立衛生研究所(R01 AG042463)の助成を受けて実施しました。